

日本の周縁地域における労働移動とジェンダー —女性の出稼ぎの過程に注目して—

山 口 恵 子

[目次]

- 1 問題設定
 - 1.1 目的 / 1.2 方法
- 2 出稼ぎの概要
 - 2.1 出稼ぎの全国的な動向 / 2.2 出稼ぎ王国・青森 / 2.3 女性の出稼ぎについて
- 3 女性の労働移動の過程—ケーススタディから—
 - 3.1 出稼ぎに行くパターン / 3.2 女性の出稼ぎ経験
- 4 小括
 - 4.1 周縁地域の労働市場とジェンダー / 4.2 出稼ぎと家

1 問題設定

1.1 目的

本稿は、青森県の女性が出稼ぎで働く過程を記述することから、戦後の日本における女性の労働移動をジェンダーの観点から読み解いていくことを目的としている。

日本の女性の出稼ぎについては、戦前のいわゆる「女工出稼ぎ」「出稼女工」などと呼ばれた労働移動がよく知られている。19世紀末から始まった、第一次産業革命と呼ばれる紡績・製糸などの繊維工業を中心とした軽工業の発達は、工場労働者を必要とし、そこへ多くの周辺部の若年女性が組み込まれていった。これらの出稼ぎについては、経済学を中心としたいわゆる農民層分解と「出稼型労働」論のなかで、そのメカニズムや日本の特徴について多くの議論がなされた（大河内 1950; 隅谷 1955 他）。

戦後になると出稼ぎは社会問題にもなり、多くの研究が着手され、経済学、社会学、社会心理学を中心に主要な研究成果が出されている（渡辺・羽田編 1977, 1987; 大川 1974, 1979; 作道 1997, 2005; 矢野 2004）。しかし、高度成長期の出稼ぎ労働は、その担い手の多くが男性であったこともあり、多くの研究は男性の労働者を所与のものとした議論が行われた。女性の大半は、母村に残って家や村を守る担い手として位置づけられたり、ごく一部で夫について働きに出ることが議論された。女性の出稼ぎも存在していたが、主要な議論の対象になることは少なかった。

こうした現状を踏まえ、本稿では、高度成長期以降から現代までの変容を視野に入れて、青森県の女性が出稼ぎで働くプロセスを明らかにする。具体的には、出稼ぎに行く経緯、地元との関係、

およびそれへの意味づけに注目する。基本的には送り出し側のPush要因に注目するということになるが、ここではそのメカニズムを明らかにすることは主眼ではない。むしろ、出稼ぎに出るバリエーションを明らかにし、それをジェンダー的に読み解いていくことをめざしている。

また本研究は、労働とジェンダーの研究にも寄与すると考えている。ジェンダーの視点からの労働研究へのアプローチは、女性を一枚岩ととらえがちなアンペイドワークやパート労働の議論は数多くあっても、地方における女性の労働市場への関心は薄いといわざるをえない。本研究は、より周縁化された女性の労働・生活から、労働とジェンダーの研究を捉え直していくことにつながると考えている。なお、本来であれば、Push-Pullの双方において、日本における国境を越えた女性の出稼ぎ労働は多く存在しており、それは例えば、エスニシティ研究や再生産領域のグローバル化の研究などとして主要な研究の蓄積がある。しかしここでは、戦後の国内出稼ぎに限定して議論を行う。

出稼ぎとは、大川健嗣や矢野晋吾らが詳細に分析しているように、概念が幅広く、定義が難しい部分がある（大川 1979; 矢野 2004）¹⁾。しかし、ここでの対象としては、主に経済的事情によって促される点と、地元への回帰性があると一応考えられる点は、従来の賃労働型の出稼ぎと同様の側面がみられる。よってここで出稼ぎとは、先行研究に習い、「生計の必要のために、一定期間生活の本拠（家）を離れて他地で働き、その後帰るという回帰的な就労形態」ととらえておく（渡辺・羽田編 1977: 3）。

1.2 方法

利用する主なデータは、関東圏の温泉地で現在働いている青森県出身の女性と、青森県在住で出稼ぎ経験のある女性の計15名への聞き取り調査の結果である。職場や自宅で、短いケースで20分、長いケースで90分間の聞き取り調査を行った。一部、2名1組で聞き取りを行った場合や、同一ケースに複数回の聞き取りを行った場合もある。本データは、2006年から継続している女性の出稼ぎに関する質的調査の一部である²⁾。

なお、このケースは数としては非常に限定的なものであり、青森から出稼ぎに行く女性の全体像を表しているわけではない。とくに本ケースの3分の2が、1年を通して多くの青森県民を雇用していたひとつの旅館（ホテル）を通じて得たものであり、この旅館の特性によって、ケースが偏っているのは否めない。しかし、本ケースには女性の出稼ぎの普遍的な側面が多く含まれていると考えられ、本研究のデータとして用いるものである。

以下では、まず出稼ぎの概要について、全国の動向、青森県の動向、女性の出稼ぎの動向の順にまとめる。次に、現代において女性が出稼ぎに出ていくパターンをその形態から3つに整理し、それぞれのケースにそって記述する。最後に、日本の女性の労働移動とジェンダーの特質について検討を行う。

2 出稼ぎの概要

2.1 出稼ぎの全国的な動向

いわゆる出稼ぎという働き方は歴史的にさまざまに存在している。日本においては、戦前・戦後とその性格が大きな変化を遂げてきた。まず、先行研究を参照しながら、全国的な動向について概観しておこう。

農商務省の資料によると、戦前の大正期の出稼ぎ者は、約705,000人におよび、内訳は8割が農林漁業外の職種で、2割が農林漁業内部の季節的な副業の出稼ぎであった。前者で最も多いのは製糸業の36.4%であり、女性が9割を占めていた。いわゆる「女工出稼ぎ」である。続いては酒造業が13.7%と多く、その他10%以下には多い順に、紡績、炭鉱、各種工業、売薬、機業、土木・木挽、土木建築、凍豆腐製造、雑工業、鉱山、遊芸、寒天製造、製麺、塩田、屋根葺などがあがっている。また、後者は、養蚕、漁労、茶摘・製茶、農作業などが多い（宮出 1956: 47-8）。つまり、戦前出稼ぎの産業は非常に多様であり、その中でも、戦後出稼ぎがほぼ男性に担われるようになることを念頭におくと、戦前の製糸・紡績業の工場にて働く女性の多さは特徴的であろう。

また、出稼ぎ労働力の供給源と労働市場の特徴は、戦前と戦後では大きく異なる。戦前の昭和初期の最大の出稼ぎ供給地は100,000人以上を数えた新潟県であり、そのほか富山や石川も加えると、北陸地方が戦前の最大の出稼ぎ供給地であったという。そのほか、広島・島根両県を拠点とする中国地方、なかでも瀬戸内海諸県と、南九州の三つが大きな拠点であった。一方、受け入れ側の地域は、京浜および阪神工業地帯を二大拠点市場として、愛知・福岡を加えた四大工業地帯が多く、これに北海道が加わる（大川 1979: 51-7）。

一方、戦後の高度成長期に入ると、周縁部から大都市部への大規模な労働移動が「出稼ぎ」として、大きな注目を浴びるようになった。農林省の統計による農・林・漁家からの「1～6カ月の予定で家を離れて働きに出た者」の数だけでも、1960年の175,000人から1963年の298,000人へとわずか3年間に70%強も増加している。そして1972年は342,000人（ただし、期間は1～12ヶ月間の予定）を数えているが、実際は100万人を超えるとも推計されている（渡辺・羽田編 1977: 13-4）。そして、その最大の労働力の供給源は東北地方であった（渡辺・羽田編 1977; 大川 1979）。

1972年の農林省の調査結果によると、その9割強は男性であり、前職は農業が約8割、出稼ぎ先の産業は、建設業が6割強、製造業が2割5分、そして出稼ぎ先は大都市が8割を占めている（渡辺・羽田編 1977）。つまり、典型的には、工業化・都市化の進む大都市の建設業現場へと農村部の男性労働者が大挙して吸収されていった³⁾。

この戦前を含む高度成長期以前とそれ以降の出稼ぎについて、矢野晋吾は、出稼ぎの社会的性格の変化を「伝統型出稼ぎ」から「賃労働型出稼ぎ」へと類型化している（矢野 2004）。

では、「賃労働型出稼ぎ」の最大の担い手であった東北地方の青森県の出稼ぎについて、より詳しくみていこう。

2.2 出稼ぎ王国・青森

青森県は、全国でも厳しい経済と雇用環境にある。第一次産業への依存度が高かった青森県は、冷害や台風などの自然条件の厳しさに農作物が大きな打撃を向けることもしばしばであった。また、総務省の社会生活統計指標によると、東北の他県に比べても製造業の集積が進まず（製造品出荷額は2004年において全国ワースト4位）、依然として第一次産業の割合が高い。完全失業率や一人当たり県民所得は、長らくワースト5位以内にある。80年代半ばからの職業安定所の新規求人数をみても、県外からの求人は経済動向と共に通常の何倍にも増加するが、県内の求人はほとんど横ばいで動きが少ない、すなわち求人が増大していない（山口 2008: 151）。

そうした厳しい経済・雇用環境のもと、および伝統的な慣行のもとに、出稼ぎは青森県のなかで「第四次産業」と呼ばれるほど大きな位置を占めており、盛んであったことはよく知られている。そして時代の進行と共に全体的な出稼ぎが減少傾向にあるなかでも、他の東北5県と比較して減少が緩やかであり、最後まで出稼ぎが残った地域であるという（作道 1997, 2005）⁴⁾。しかし、時代とともに、青森の出稼ぎの行き先や形態、また位置付けは大きく変容してきた。

明治期から戦前期にかけての青森県の出稼ぎは、北海道とカラフト、カムチャッカを基地とした北洋漁業への漁業出稼ぎがほとんどであった。しかし高度成長期に入り、1960年代後半頃には、北海道が激減し、東北各県ならびに県内出稼ぎが減って、代わりに関東へ向かうのが半数を超え、また名古屋などの中京地区への出稼ぎも年々増え始めた。就労先で多いのは圧倒的に建設業である（大川 1979; 石川 1987; 弘前大学人文学部社会行動コース 2006）。すなわち、戦前は、北海道・カラフト方面へのニシン漁、北洋漁業、そして道内の建設業の仕事が多かったのが、漁場の縮小や漁獲量の減少等に伴って、その数は減少し、高度成長期の建設ラッシュ著しい関東圏の建設業へと、出稼ぎ先のトレンドが変化した。その一方で、それほど強調されないのであるが、製造業出稼ぎも一定の割合を占めていることも見逃せない。

この青森県の出稼ぎは、初期のころは縁故による労働が多かった。戦前・戦後を通じて、津軽地方の出稼ぎの特色は「モグリ」と批判された縁故就労であり、それは主に漁業出稼ぎが要請した労働慣行であったという（作道 1997, 2005）。縁故出稼ぎは、村単位で親しい仲間と出稼ぎに出ることへの安心があり、継続的に就労先を確保することにもつながっていた。しかし、「安全な出稼ぎ」などのスローガンのもとで、とりわけ職業安定所を通じた就労や、行政への届け出の強力な推進など、出稼ぎの「制度化」が進んだという（作道 1997）。また同時に、出稼ぎは農閑期の季節出稼ぎ（「季節」）から、一年中働き、盆や正月にのみ帰るという「通年」出稼ぎ（特定の季節のみではなく、1年間を通して働く出稼ぎ）へと質的に変化している。

作道信介は、こうして出稼ぎが地域で暮らすための選択肢として客観的にも主観的にも身近に存在する様態を「出稼ぎのベースライン化」という。そして、Push-Pull理論に対して、こうした青森の出稼ぎは「地域を形成しそこに人を留め置く力（Hold）」として機能したことを指摘している（作道 2005）。

しかし、時代を追うにつれて「出稼ぎ」とくくられた就労は減少傾向にあり、他地域と同様に、統計に計上されるような出稼ぎはほとんど終了に近い。ただし、たとえば若者の期間を定めた製造

業での就労は出稼ぎとは呼ばれないし、統計にも計上されないが、実質的に出稼ぎに近い労働移動が依然として継続していることはいうまでもない。

さて、こうした青森県の出稼ぎであるが、そのなかで女性はどうな位置を占めていたのだろうか、統計データよりデッサンしてみよう。

2.3 女性の出稼ぎについて

青森県の『出稼対策の概況』によると、行政が把握できた最低限の数とみなすべきであるが、1971年から今日までの出稼ぎ数のなかで、もっとも女性が多かったのは1975年である。男性63,314人、女性13,400人であり、女性は全体の17.5%を占めていた（青森県商工労働部 2008）。1980年には3,688組の「夫婦出稼ぎ」の存在が確認されている。つまり、女性は単身で行く場合もあるが、夫とともに働きに出るという形態も相当の割合で存在していたことが分かる。そして全体の数は、男性と同様に急激に減少していき、2007年現在では、男性7,172人に対して、女性はわずか640人である（青森県商工労働部 2008）。

年齢については、筆者の出稼名簿の統計分析によると、1960年代は10代と20代で6割を占めていたが、2000年代は50代半ばから60代前半が多くを占める。男性の出稼ぎの高齢化傾向はよく指摘されることであるが、女性はさらに高年齢であった。職種については、1960年ごろの女性の出稼ぎは、北海道での農耕、缶詰や水産加工の作業、建設業のいわゆる「飯場」の炊事が多かった。そのうち、男性と同様に関東圏の建設業や製造業の仕事の比重が高まる。そして出稼ぎが数的にも激減した2000年頃になると、サービス業が6割を占め、とくに宿泊施設やリゾート産業で働く傾向が強くなっている（山口 2010）。もちろんこれは、出稼ぎの数が激減するなかで、こうした仕事が残った、という側面もあるかもしれない。

この男性と比べた時の青森県の女性の出稼ぎの変化からは、次の3つことが留意されよう。

第一に、戦後の女性の出稼ぎは一貫して男性に比べて少数であり、その中でも夫婦出稼ぎという形でパートナーと共に行く割合も低くない。全体の数でいえば、村には女・子ども・年寄りが残される、といわれたように、村や家に残り「留守家庭を守る」女性が圧倒的で、出稼ぎに出るとしても、家族とセットになったものも一定存在する。しかしその一方で、単身に出ていている場合もあり、彼女らの条件はどのように異なるのだろうか、これは次章で検討していく。

第二に、数が圧倒的に異なるので留保が必要ではあるが、職種が建設業に特化していく男性と比べて、女性はその時代ごとに必要とされる多様な仕事についている点も見逃せない。つまり、女性の労働力が補助的で景気調整弁的な流動性の高い労働力として必要とされることが伺えるところである（竹中 1989他）。

第三に、しかしそうはいうものの、女性の出稼ぎ先の職種は限られており、「女の仕事」といわれがちなものが多い。とりわけ、飯場での炊事（洗濯や掃除なども含むことが多い）は、建設業で働く夫に連れ添い、主婦業の延長として期待されるものといえよう。同様に、旅館・ホテルなどの宿泊業も、歴史的により女性の労働者が好ましい・ふさわしいと考えられて性別職域分離が進んでおり、かつ絶えず人手不足のため、中高年でも雇用するということである（神谷 1995; 武田・文

2010)．ただし、その一方で機械化・マニュアル化が進み単純労働が可能となった製造業は、好況期の人手不足の中で、性別に関係なく遠方からも労働力を調達するというものであろう。

以上、全国および青森県の出稼ぎについて、とりわけ女性のそれに焦点を当てながら、概観してきた。これらを念頭におきつつ、以下では、具体的なケーススタディより、女性の労働移動のプロセスを明らかにする。

3 女性の労働移動の過程—ケーススタディから—

3.1 出稼ぎに行くパターン

先述したように、検討するケースは、関東圏の温泉地で現在働いている青森県出身の女性と、青森県在住で出稼ぎ経験のある女性の計15名である。

表1 出稼ぎ者のケース一覧

| 女性の出稼ぎのパターン | ケース | Ⅰ 基本属性 | | | | Ⅱ 出稼ぎ開始時の条件 | | | | Ⅲ 出稼ぎの経過 | | | |
|--------------------|-----|--------|--------|-----|-------------|---------------------------|--|---------|-------------------------|------------|--|----------------------------|--|
| | | 性別 | 生まれた年代 | 年齢 | 結婚歴 | 出稼ぎに出る前の生業や仕事 | 出稼ぎに出た主な理由 | 出稼ぎ開始年齢 | 出稼ぎ開始時の子ども年齢 | 夫婦出稼ぎ年数 | 出稼ぎ地域と職種 | 現在の地元や家族との関係 | |
| Ⅰ 若い頃、短期で夫について出稼ぎへ | A | 女 | 1950 | 50代 | 有り | 夫は約40年間出稼ぎりんご栽培あり | 生活のため | 20代前半 | 長子2歳のち2人誕生 | ○ 3 | 自動車部品工場(神奈川)→ご飯炊き(埼玉) | 現在は地元で生活 | |
| | B | 女 | 1950 | 50代 | 有り | りんご農家・田んぼ・夫は出稼ぎ | 家の増築や台風でリンゴが落ち、お金が必要になった | 30代後半 | 小学生 | ○ 4 | オートバイ部品工場(静岡・4年) | 現在は地元で生活 | |
| Ⅱ 子どもが独立後、夫婦で出稼ぎへ | C | 女 | 1940 | 60代 | 有り | 組み立て(テレビ)製材所 夫はタクシー | 地元で仕事ない 子どもが学校卒業し、家にいるのでいなくていい、帰ってもやることない | 40代半ば | 長男20代 次男10代 | ○ 17 | 自動車製造工場(愛知・5年)→コンクリート会社(静岡・4年)→旅館(関東・6年) | 1年に1回帰る 子どもとは携帯で連絡 | |
| | D | 女 | 1940 | 60代 | 有り | どくになし (大工の夫について10年長庚へ) | 家にも年金ももらえない | 50代後半 | 子2人 | 今年× 去年○ | 6 旅館(関東・6年) | 今年は週1回電話 今年は仕送りした | |
| | E | 女 | 1940 | 60代 | 有り | 農業(田・5反) 一貫す | 地元で仕事ない 長男結婚、孫誕生、家にいる家にも何もない | 50代後半 | 長男30代 次男30代 三男20代 | ○ 6 | ホテル(長野・半年)→旅館(関東・5年) | 用事のとき帰る 関東にいる子ども達に会う | |
| | F | 女 | 1930 | 60代 | 有り | 酒小売(自営業) | 過年で働きたかった、借金有り 地元で仕事ない 事情があって店を辞めたから夫婦で一緒に働きたかった | 50代後半 | 長女30代 次女30代 | ○ 10 | 旅館(関東・10年) | 電話しよつちゅう 東京にいる子どもが遊びに来る | |
| | G | 女 | 1940 | 60代 | 離婚 | デパート店員 産科助手など | 地元で仕事ない 地元のパートでは食べれない 年金ももうまで働く | 30代後半 | 子なし | × | 20 菓子工場(神奈川・8年)→パン工場(神奈川・3年)→旅館(関東・9年) | 現在は地元で生活 | |
| | H | 女 | 1950 | 50代 | 離婚 | 組み立て 電子関係など | 地元で仕事ない 年齢があった | 50代前半 | 子3人 末子は10代 | × | 5 旅館(関東・5年) | 月2回電話 関東にいる子どもに会う | |
| Ⅲ 単身で出稼ぎへ | I | 女 | 1940 | 60代 | 有り 現在是不明 | △ | 子どもが片付いたのでこの機会にどこかに出ようと思って調理をやりたいかった | 50代前半 | 子あり | △ 10 | 旅館(関東・10年) | しよつちゅう地元で帰っている | |
| | J | 女 | 1940 | 50代 | 離婚 | 美容師(22年) 縫製会社 スーパー | 地元で仕事ない 年齢的にこしかなない | 50代前半 | 長男20代 次男 長女20代 | × | 4 旅館(関東・4年) | 1ヶ月1回は東京にいる子どもに会う | |
| | K | 女 | 1950 | 60代 | 未婚 | 飲食業(自営、23年) | 地元で仕事ない 年金では食べていけない 両親や介護していた弟も死亡 | 50代半ば | 子なし | × | 5 旅館(関東・5年) | 年1回墓参りに帰るくらい | |
| | L | 女 | 1940 | 60代 | 死別 | 農業(田んぼ) 病院で付き添い(3年) | 友人に誘われて 下の子が嫁に行った | 50代半ば | 長女30代 次女20代 | × | 11 複数のホテル(長野・11年) | 結構電話する | |
| | M | 女 | 1940 | 60代 | 死別 or 離婚 | 農業(田)一貫す 製材所勤務(25年) | 家の改築資金 子どもや孫のため 家康の入院に急がかかる | 50代半ば | 子2人 | × | 10 ホテル(長野・5年)→旅館(関東・5年) | 子どもに仕送り 週1、2回電話 | |
| | N | 女 | 1930 | 60代 | 有り 現在是不明 | 農業 | 地元で仕事ない 家庭の事情あり | 50代後半 | 長女30代 次女30代 長男30代 | × | 11 旅館(関東・11年) | 姉・孫と20日に1回電話、泊まりに来ることも | |
| | O | 女 | 1920 | 80代 | 死別 | りんご農家 | リンゴが台風で落ちた。でもお金が理由というよりは行ってみなかった。家には嫁も娘もいた | 60代後半 | 子2人 | × | 8 旅館(関東・8年) | 現在は地元で生活 | |

注1) 生まれた年代と年齢は調査した時点のものである。

注2) △は不明を示す

まず、この15名の属性を大づかみに確認しておこう(表1参照)．生まれた年代は1920年代から1950年代にわたり、1940・50年代が多くを占める．出身地は、Gさん以外は、みな歴史的に出稼ぎが盛んであった青森県の津軽地域である．結婚歴は、結婚してパートナーがいる人が6名、未婚や離死別でいない人が9名と、本調査の対象者はパートナーがいないケースが多い．一方、出稼ぎに

行く前は、農業、美容師や店のオーナー（酒小売・飲食店）などの自営業、および地元の製造業（電子や縫製関係、地場産業）などで働いていた。いずれにしても、自営業以外は、農業の兼業も含めて、大半の女性がさまざまなパート・アルバイトの仕事を移り変わって働いてきている。特徴的なのは、出稼ぎの開始年齢であり、20・30代のより若い頃に出稼ぎに出たのが3名で、残りはすべて40代後半以降、とりわけ50代で出たケースが多い。これはのちほど詳述するように、子どもの養育との関係が大きいのである。出稼ぎは長いケースで20年、短いケースで3年継続していた。

こうした対象者であるが、彼女らの出稼ぎは、その形態と年齢によって、大きく3つに分けられるようであった。第一に、若い頃に夫の出稼ぎに短期でついていったことがあるというパターンである（A、Bさん）。第二に、子どもが独立後、夫婦で出稼ぎに出るパターン（C、D、E、Fさん）。第三に、単身で出稼ぎに出るパターンである（G、H、I、J、K、L、M、N、Oさん）。

以下は、この3つのパターンから代表的ないくつかのケースを記述する形で、検討していく。その際、特に注目したいのは、誰がいかに出稼ぎに行くのか（または戻るのか）ということであり、具体的には、出稼ぎに出たきっかけ、地元との関係、およびそれへの意味づけに着目する⁵⁾。

3.2 女性の出稼ぎ経験

3.2.1 若い頃に夫について短期で出稼ぎに行く

まず、Aさん（50代）のケースをみてみよう

Aさんの夫は、父親がおらず、母親が一人で6人の子どもを育てた。年長だった夫は、家族のために10代から出稼ぎに出た。兄弟を「片づける」、すなわち結婚させ送り出すために、ずっと働き、60歳まで40年近く、主に土木・建設業に出稼ぎに出ていた。彼女は20代前半で結婚した。すぐに子どもができたが、それを夫の母親に預けて、約3年間、夫の出稼ぎについて行った。「私はただ、生活のためしかなかったね、出稼ぎっていうのはね」と語り、「生活のため」すなわちお金を稼ぐために出稼ぎに出たという。1970年前後のことである。

仕事は、すべて11月半ばから3月末までの仕事だった。同じ村の人とも一緒に働きに行った。「その会社からちょっとこう、頼まれた人が、おめえ行かねえか、おめえも行かねえがとってあって、それで最初行ったですね。」

最初は、神奈川にて自動車の部品を作る下請け会社で働いた。社員の他に2、30人の出稼ぎの人を使っていたが、10人くらいは沖縄の人、あとは東北の人だった。彼女は鉄を削ってボルトやねじを作る仕事をしていた。8時から17時までの仕事で女性に残業がなかった。夫とともに社宅のアパートに入っていた。次に、埼玉の建設業の飯場で働いた。労働者は50人ほどいたが、すべて八戸、南部、津軽から来た青森県人で、「通年」で現場を持っていたという。彼女の仕事はご飯炊きで、10歳ぐらい年上の女性と一緒に毎日50人分のご飯を炊いていた。朝の4時起きであった。

「（結構、自動車の方も大変だった？）大変…そうでもないね。どちらかっていったら力仕事でできる方だったので。でも自分としては、働かねばならないっていうのがあったので。大変だなんて、

嫌いだのそんなの言ってもらえない。私仕事してつらいと思ったことひとつもない。楽しいのはね、お昼休みバレーボールやったりね。そういうのが好きだったんで。」（Aさん）

彼女はつらいと思ったことはないと言い、バレーボールなども楽しかったと振り返る。ただ、大変かどうか、好きか嫌いかなどということを行っている場合ではなく、とにかく「働かねばならない」という、当時、生活上の必要性があったことがここからもうかがえる。

彼女の出稼ぎは、第二子ができて、「子育ては自分でしないと」と思い、終わった。

次に、Bさん（50代）のケースである。

Bさんは、青森で生まれた。家はりんごを主とする農家で、田んぼも作っていた。彼女は30代後半の1990年から4年ほど、出稼ぎに出た経験を持つ。理由は次のようなものである。

「自分はお金の必要があったはんで、夫婦で行ったのよ。私の場合はな。だけど次のあのほらりんご台風ってすごい台風が来たの。平成3年に。そういうふうになまた生活が。やっぱりお金が必要になって。ここでちょっと頑張ってみようかってあれがあったんで、夫婦で行った。そのとき、まだおじいちゃんおばあちゃん、まだ元気だはんでさ。子どももまだ小学生だったけども。何年行った、4年かな。それくらいしか行ってない。夫婦で行ったの。お父さんは毎年行ってるけど、私自身初めて行ったのは。」（Bさん）

つまり、彼女の夫は長らく毎年出稼ぎに出ていたが、金銭的な必要があって妻も出稼ぎについていくようになった。しかも多くのりんごが落ちた台風禍も続き、彼女の出稼ぎは4年間続く。そのとき子どもは学童期であったが、まだ当時元気だった祖父母が面倒を見ることによって、彼女が出ることが可能になっている。彼女らの出稼ぎ先は静岡県内の製造業工場であり、ベルトコンベヤーのラインでエンジンのパーツをつけていた。

ところで、この経験は、彼女にとっては新鮮なものとして語られていた。

「でもさ、私にしてみれば、農業以外のことであったはんで、最初はすごいおもしろくて。初めてこういう仕事したしさ。で、初めてなに、お給料。今までもらったことなかったから。ずっと農業だから。ほとんどりんご、あのほら働いたことなかったから、すごいおもしろかったよ、私にとってはね。8時から17時まで仕事してさ。農業は朝早くから自分の時間、6時だの7時だのなんも関係なくして、うん。でも一応、ここは8時から17時までとかって決まってるじゃない。休み時間も何時間とかって。そういう時間に縛られたことなかったから最初はすごい楽しかったよ。別の世界を見たっていう感じで。その静岡は夫婦で、そのときは同じ村から4組、一緒に行った。だからけっこう楽しかった。お休みになるとどっか出かけたり。ここにいで毎日仕事したってお金もらえるわけじゃないしさ、今日1日頑張ればいくら入るとかさ、あ、今日2時間の残業だったらいくら入るとかって、すごいそういうの。軽い研修とかなんとかあってあったりすればまたお金につながるっていう。だから、じゃ頑張ろうとかって。」（Bさん）

つまり、時間の不定期的な、また妻には直接の給料があるわけではない農業を生業とした生活から、時間に縛られ、給料を本人がもらう働き方は、彼女にとっては「別の世界を見た」と新鮮で楽しいものと意味づけられている。また、同じ村から4組の夫婦が働きに出ており、一緒に出かけるなどの楽しみもあった。お互いの生活のサポートもさまざまな形で存在したことであろう。彼女の出稼ぎは、何とか危機を脱して生活ができるようになったということで、4年間で終わる。また冬場は地元でりんごの袋詰めの仕事もあったという。

彼女らのケースは、村および世代を超えた直系制家族の農業の中に埋め込まれた出稼ぎということが出来るだろう。もともと夫が出稼ぎに出ており、それは同じ村から行くという地縁の紐帯の中に組み込まれたものであった。それに加えて、緊急的な家計の助けのために、妻も一緒に働きに出るのである。その際に、直系制家族のなかで、子どもの面倒を見る祖父母がいたという条件も重要であろう。一方で、県内で嫁となり、農業と家を支えてきた女性が、初めて外に出たことで新しい生活や賃労働を垣間見る機会になっている点も注目される。直接の給料がない、時間の際限のない、世代の縦の関係に縛られた、遠方に出ていくことの少ない、そうした当時の農家の女性を取り巻く状況のなかで、出稼ぎは女性に新しい生活をもたらすものとしても経験されていた⁶⁾。

3.2.2 子どもが独立後、夫婦で出稼ぎに行く

先の事例は、若い頃一時的に夫について出稼ぎに出たものであったが、次に、中高齢になってから夫婦でまとまった期間、出稼ぎに出たケースである。表1ではC、D、E、Fさんにあたり、ここでは、40代から職場を変えながら17年近く出稼ぎに出ているCさん、次に、50代から旅館へと働きに出たEさんを代表事例として取り上げてみたい。

Cさん(60代)は、30代後半から地元で家電の部品組み立ての製造業で働いたり、製材所でアルバイトをしていた。夫はタクシー運転手だった。子どもが高校を卒業し、「若い人が家にいるから家にいなくていい」ということと、地元で仕事がないこともあって、出稼ぎに出ることにした。夫婦で一緒に働ける出稼ぎ先を職業安定所で探した。まず、1980年代半ばの頃に、5年間、愛知県の自動車製造工場にて車の椅子カバーを作る仕事に従事した。次に、静岡県でコンクリートの会社で働いた。そして、50代半ばからは関東圏にある旅館にて調理場の盛り付けの仕事で働いている。

子どもは「帰ってこい」と言うが、家に帰ってもやることもないし、邪魔扱いもされたくない、お互いに自由にやっている方がいいと考えている。職場で人間関係が悪かったりすれば帰るが、今のところ仕事は「わりと環境がいい」し、夫婦で一緒なので安心のようだ。休みの日に一緒に温泉に行ったり、観光をしたり、パチンコに行ったりして出かけるし、ストレスがたまると、夫婦でお互いに言って解消する。彼女は一人では出稼ぎに行かないという。

次に、50代後半から旅館へと働きに出たケースである。Eさん(60代)の家はりんご農家の多い集落にあった。そこで田んぼを五反ほど作っていたが、10年ほど前に夫が腰を痛めてからは、人に貸して作ってもらっている。2000年に入ってから出稼ぎに出た。そのきっかけは「生活がかかってるから」と、経済的な必要があるのはいうまでもないが、そのほかにもさまざまなタイミングがあった。

「長男もほら、お嫁さんもらって、子どもも生まれたし、で、田んぼやらなくなったでしょ。だから、ええ、なんか家にいてもね、あれだしって、ちょっと出てみるわって、それで長野に友達に誘われて1回行ったの。そしたらわりとね、楽しかったから。じゃあ、向こうにしようって、それでまた、ここへ来てみて。友達みんなに恵まれて、うん、ずっと今まで。ええ、おかげさまでね。（じゃあ家はもう空けてる感じに？）長男と孫がいるから、まだ元気なうちにね、うちにいても何も仕事ないしさ。それにほら、子どもさんこっちに、三男もいるでしょ。だから、どっちかといえどこっちの方から行けるじゃない。遊びに、直に、たまに1年に1回か2回くらいね、会えるから。」（Eさん）

長男が結婚して世代交代し、家はまかせられること、田んぼに人手がかからなくなったこと、家にいても仕事がないこと、子どもが関東にいて会えること、仕事がわりと楽しかったこと、そうしたことも手伝って出稼ぎに出た、および継続的に続いていることが分かるだろう。

最初は友人から誘われて、長野のホテルに11月から6カ月間の「季節」で行った。スキー場の小さいホテルで、仕事はなんでもやったという。その後、1年を通して働きたいと思い、職業安定所で関東圏の別の旅館を見つけて、夫とともに働いている。この旅館は多くの青森県人を雇っており、Eさんも青森県の「お友達に恵まれてるから、それが一番楽しいですね」という。

彼女らは中高年齢になってから、夫婦で出稼ぎに行ったケースである。両者とも、子どもが学校を卒業したり結婚するなどして、手がかからなくなったタイミングで出ている。経済的な必要はもちろんのこと、家は子どもが継いで孫もいたりするので、そちらは安心してまかせ、また、お互いの「自由」もあり、場所を変えて働けるうちは働こうということである。そして近い将来は地元に戻ることが想定されている。彼女らのケースは、子育てが一段落した「空の巣」期に、また次の世代に譲った中高齢期に、夫婦で一時的に地元を出て働くということである。経済的な必要性はいうまでもないが、次世代との関係性の中でそれが促されている点が注目される。

また、彼女らが出稼ぎを始めた1990年代、2000年代になると、仕事を探す手段は、もはや地縁のつながりではなく、職業安定所などの公的機関や友人による口コミとなっている⁷⁾。これは、おそらく生業との関係もあり、Cさんはもともと農家ではなく、またEさんは農業をやめ（人にまかせ）、働きに出ているのである。同じ村の関係をそのまま出稼ぎ先に持ち込むことによる仲間との強い紐帯はもはやみられない。しかし夫婦の紐帯は非常に強く、さらに、たまたま仕事先で出会った多くの青森県出身者の存在は、楽しいものとして語られていた。

3.2.3 単身で出稼ぎに行く

① 中年齢の頃から単身で渡り歩く

以上のパターンは、基本的には出稼ぎという賃労働が、直系家族の上の世代、下の世代、そして夫との関係の網の目の中で、遂行されているものであった。これに対して、単身女性の出稼ぎは、やや状況が異なる。表1では、G、H、I、J、K、L、M、N、Oさんにあたる。

まずは、より若い頃から単身でいくつかの出稼ぎ先を渡り歩いたGさん（60代）のケースである。Gさんは県外で生まれた。父親は炭鉱の坑内で働いていたが離婚し、彼女は母とともに実家の青森に帰った。高校を出たGさんはデパートに5年、歯科助手として2年働き、結婚した。しかし、夫が働かないので離婚。それをきっかけとして、彼女は出稼ぎに出るようになった。40歳前後、時は1980年代後半のことである。

「（どうして出稼ぎに出ようと思われたんですか？）市内には、短いのはあっても、8時間労働が少なかったです。それに私は資格もなかったし、免許も持ってないし。結局手っ取りばやかったんですよ。職業安定所に仕事来てたのが、そんななかったです。工場だと、あまり人に接しないで、そういう仕事もいいかなあと思って。」（Gさん）

地元には長い時間働ける仕事が少なく、しかも職業安定所に来ている仕事も少なかったという。そうしたなかで、なおさら彼女は資格や免許などの技能を持っておらず不利であった。自分で稼がなければならない単身者がまとまって働くことができ、特段の技能を必要とせず、かつ女性も働ける職場としては、好景気の中で大量の未熟練労働者を必要として日本全国から労働力を吸収した製造業の工場が最もポピュラーであったろう⁸⁾。

最初の仕事先は、神奈川県にある大きな菓子工場だった。仕事は、ベルトコンベヤーで流れてきた商品のパック詰めや検品の仕事だった。9年ほど働いたが、不況になってから、「季節」やパートは解雇になった。次は、同じく神奈川県内の大きなパン工場のライン製造に2年ほど行った。

「時間は9時から6時までで、もうお昼、もう終わり？という感じでした。時間があっという間に過ぎて行きました。もくもくと仕事してるから、工場は、私は好きですね。ラインは、流れるとおりにやればいいから。工場はいいと思いました。でも45歳で終わりですから。（なんでおやめになったのですたっけ？）夜勤が始まるので。その頃、男の人みても、もう体ボロボロで、それに年齢もあったでしょうね。今だとなにがなんでもやめないでしょうけど、他にいけないから。特に〇〇パンは、3日出て、3日休むみたいな感じで、8時で終わって、その夕方5時にまた出なきゃいけない。そういうのをみてるから、大変だなあと思って。」（Gさん）

彼女にとってはラインで「流れるとおりにやればいい」という工場勤務は、仕事時間もあっという間に過ぎるように感じ、好ましいものであったという。しかし女性の夜勤が始まったことをきっかけにやめた。そして、次に職業安定所で仕事を探したときに、8時間働けるところ、年齢的に働けるところとしては、この旅館しかなかった。最初は「季節」であったが、翌年から1年を通して働くようになり、10年間働いた。その後、年金がもらえるようになったことと、家の契約の問題があり、現在は地元に戻った。

Gさんは離婚後、一人で生きていくためにフルで働く必要があり、未熟練の出稼ぎの仕事に従事してきた。出稼ぎの制度化が進む中で、職業安定所は、家や地縁のつながりからはずれた彼女の唯

一の仕事を探す手段であった。そうした彼女の出稼ぎ先とタイミングは、労働をとりまく環境の変化とライフステージに密接に関連していて興味深いものである。つまり、離婚がきっかけで自立しなければならなくなったとき、県内には8時間フルに働ける職場は少なかった。そこで40歳前後で出稼ぎに出る。最初の菓子工場はバブル経済後の不況によって非正規の労働者がまず切られる、ということで解雇になっている。続くパン工場は、1999年の労働基準法の改正によって女性の深夜労働が可能になった。彼女はこの深夜労働がネックでやめている。次の職場を探した頃には50歳前後であり、年齢的に中高年齢の女性が働ける場所は限られていた。そして、かろうじて公営住宅を確保しており、かつ年金がもらえる歳になったことから、地元に戻ったのである。

②高年齢になってから単身で出稼ぎへ

最後に、高年齢になってから単身で出稼ぎに行くパターンである。先述したように、本調査対象者の50代を過ぎてからの稼ぎ先は、すべてホテル・旅館などの宿泊業であり、時代は1990年代以降となる。ここでは、早くに夫と死別したLさん、家庭に事情を抱えるNさん、未婚で長らく自営業を営んでいたKさん、比較的期間の短いHさんを詳しくとりあげる。

まずは、Lさん（60代）の例である。彼女の家は農家であり、30代で夫を亡くした。娘2人はまだ学校に通っていたので、「娘を残しては出られない」ということで、必死で働いた。3年ほど地元の病院の付き添いで働いていたこともある。そして娘たちを卒業させ、嫁がせてから、出稼ぎに出た。1990年代半ば、Lさんが50歳代半ばのことである。

初めての出稼ぎは、長野県のスキー場近くのホテルだった。きっかけは、先のEさんと同じで、友人の口コミによる。「みんな長野いいところだって言うから、じゃあ行ってみたいなと思って」ということである。長野県のスキー場近辺のホテル・旅館に、働き先はいくつか変えつつも、11年ほど「季節」で出稼ぎに来ている。山の中の民宿のようなこじんまりとしたホテルで、県外からの修学旅行生も多い。仕事は、ルーム（部屋付きの接客や、備品の補充、掃除他）も、掃除も食堂もなんでもやるのだという。基本は冬季就労なので、他の時期は青森の家に帰郷している。地元では一人暮らしなので、もう少し年を取れば娘のところに行くが、「まだお互いに自由があるじゃない、今のところはのんびり気楽にして」ということである。

Nさん（60代）は、嫁ぎ先は農家だった。出稼ぎを始めたきっかけは、「家庭の事情」という。娘と同居をし始めた50代後半になってから、1990年代の半ばごろに働きに来て、11年近く働いている。「事情ない人はこんな歳まで働かない。事情あるからこの歳でも働いている」と語り、何らかの働かねばならない事情があるという。

最初の頃は、娘や孫に会いたいし、人間関係や仕事のことが大変だった。人前では泣きたくないから我慢して、部屋に帰ってきて泣いていたという。今は「慣れた仕事をすればいいだけ」。人間関係は「どこも同じ」、女性が多いところは大変だといえる。苦労については、出稼ぎで来ているから、「青森県の人はお金がない、生活困っている」と、この関東圏の地元から働きに来ている人は思っている。実際には聞かれていないが態度でわかる。「それはそれでいいや、と自分の胸におさえて仕事がんばる」という。良いことは、仕事が「自分でもこんなふうにはできるんだな、ここま

でよく我慢した」と思う。「ここにいるうちは一生懸命働いて頑張る」「そうやって帰る」と思っている。今は年金をもらいつつ働いている。「歳も歳だし」そろそろ帰ろうと思っている。でも帰るのにはお金かかる。以前に帰ったのは「だいぶ前、覚えていない」と語るNさんは、おそらく家に帰りにくい事情があるものと推察される。

Kさん(60代)は、高校卒業後、飲食店に勤めた。30歳で独立し、50代前半まで数名の人を雇いながら店をやっていた。しかし、弟の病気の看病のために店をたたんだ。その後、弟は亡くなった。もう父母も亡くなっているし、妹も嫁いだ。仕事を探したときに、年齢的にも地元には仕事なかった。パートの2、3時間、しかも週3回とかでは、生きていけない。「いくら家賃が安いって言っても、家賃で終わってしまう」「年金なんて少ししかない、とても年金では食べていけないでしょう」「元気であれば働かなければいけないと思ってます」。

2000年代半ば、本人が50代半ばの頃、職業安定所を通じて旅館に働きに来た。旅館の仕事は、ここで働いている知人がいたので、ある程度は知っていた。でも最初とはまどった。「こういう経験がないから」「やっぱりね、肉体労働ですよ、大変ですよ」「体力勝負なので楽だとは言えない」。時給にて、パートのような形で働いている。出稼ぎ手帳は一応持っているが、1年を通して働いている。「地元には仕事があれば、こんなところには来ないよ」。青森には年に1回お墓参りに帰るくらい。でも今回は「もう去年の9月から、1年近く帰ってないよ。まあ帰ってもね、兄弟の顔見るくらいで。」

最後に、Hさん(50代)のケースである。5人兄弟の末っ子で、高校卒業後、製造組み立てや電子関係などいろいろなところに勤めてきた。農業の経験はない。20代半ばで結婚するも、事情があって離婚することとなった。はじめて出稼ぎに出たのは、末子が高校の最後の年のときであり、年齢的には50代前半、2000年代半ばの頃である。仕事は職業安定所で探した。「出稼ぎのきっかけ、まあ、向こうでも仕事探したんですけども、やっぱり年齢的にも仕事がなくって、やっぱりこっちの方で年齢的にあったので、それでまず来ましたけども」と語り、青森には年齢的に仕事なかったという。当初は「季節」で手帳を持って来たが、翌年からは1年を通して働いている。

旅館内の従業員はもちろん、旅館のある地域の地元の友人もでき、たまに食事を共にしたり、観光に繰り出したりする。「第二の人生、楽しまなくっちゃ」と語り、生き生きと仕事をこなしている。子どもとは月に2回電話するくらいだが、関東にいる子どもと時々会えるのも楽しみにしている。これからずっと働くことを希望している。彼女にとっては、離婚のつらい経験や兄弟・親戚の中での引け目を感じる土地から離れて、新しい仕事と生活を始めることは、人生の仕切り直しの場所となっているようである。地元には仕送りをする必要もないし、もはや帰る必要もないようである。

以上、中高年齢になってから単身で出稼ぎに出た女性は、死別・離婚やなんらかの「事情」があるケースが多かった。子どもがいる場合は、地元で自営業やブルーカラーの仕事をつなぎながら必死で子どもを育ててきた。および未婚の女性は、長年の仕事をやめて兄弟の介護に携わった。すなわち女性達は「家族的責任」と呼ばれるような役割を果たしてきた。そして、それが一段落したのち、仕事を探した時にまとまった時間働ける場所は、この出稼ぎの旅館・ホテル以外に選択肢がほ

とんどなかった。現在子どもがいるケースは、娘との連絡は頻繁にある。つまり、彼女らもまた、先の2つのパターンと同様に、家族との関係がないわけではない。しかしそれは家に埋め込まれているというよりは、娘との関係に限定されており、ましてや実家との関係は薄いのである。しかも子どもと青森の地元で同居しているケースは少なかった。彼女らは青森には帰りにくい、および帰る必要がない状況にあると考えられる。しかしこうしたなかで、出稼ぎ先での生活が第二の人生として積極的に意味づけられる場合もあった。

4 小括

4.1 周縁地域の労働市場とジェンダー

青森県は日本のなかでも、厳しい経済条件のなかにあり、一貫して他県への労働力の供給地としての役割を果たし、周辺的な労働市場のなかにあった。女性および中高年齢であることは、そうした周辺的な地域労働市場のなかの、さらに周辺に位置づけられる⁹⁾。

たとえば、女性の地元での前職をみると、美容師や店のオーナー（酒小売・飲食店）などの農業以外の自営業ではまとまった期間にて同一の仕事で働いているが、それを辞めた後、および農業の場合は兼業として、地元の製造業（電子や縫製関係）や地場産業の製材所、スーパー、病院の付き添いなど、さまざまな仕事に従事していた。多くの彼女らの生活は一時的にせよ苦しい状況にあり、とりわけ単身者には将来への不安もあった。

竹中恵美子は、女子労働市場構造の一般的特質を検討し、女子の労働が労働市場のなかで流動性の高い、不熟練の、しかも下層市場へ集積するという傾向があるという。なかでもとりわけ女子労働力の年齢差別は重要なものであり、大企業においては、労働力の流動性をはかる労務政策によって、中高年齢労働力の排他的政策が貫かれる。したがって、とくに女子の高年齢者はおしなべて労働市場の最下層に沈殿する部分となることを指摘している（竹中 1989: 165-7）。男性にもまして女性の働く場所は限られており、とりわけ中高年齢層のフルタイムの仕事は限られている¹⁰⁾。地方の労働市場におけるジェンダーと年齢による制約は、非常に大きいのである。まずは、そうした地方の女性、とりわけ中高年齢の女性をとりまく経済的な厳しさは、あらためて確認しておくべきである。

出稼ぎの仕事は、そうした周縁地域の女性に、正規雇用ではないがまとまった時間、比較的技能が問われず、生活をすぐに移せる寮付きで、および夫とともに働ける場所を提供するものとして、窓口を開いていた。夫と同じ建設会社の飯場で、炊事や掃除などの仕事をすることは以前からよく行われていた。また、景気が上向き、自動車産業も好況期にあるなかで、製造業は全国から労働力を集めた。しかし、製造業の仕事には年齢制限があった。高年齢になると、労働集約型産業で絶えず人手不足、かつ女性を好む宿泊業のみが、彼女らの職場であった。ここからは、女性の「家事の延長」とされるような労働の性別職域分離が明瞭にみてとれよう。

このように、地方の女性の出稼ぎは、幾重にも重なったジェンダー構造のなかにあった。

4.2 出稼ぎと家

以上とも関連して、もうひとつ注目すべきは、女性の出稼ぎが家との密接な関係のなかにあることである。高度成長期における青森から関東圏への大規模な出稼ぎは、農閑期の「季節」出稼ぎから「通年」出稼ぎへと質的に大きく変化したことは先に述べた。女性の出稼ぎもまた、こうした時代を追った変化があったことはいうまでもないが、男性以上に、家と個人のライフコースのクロスするところに存在し、質的に変化しているようであった。

第一の女性の出稼ぎのパターンは、直系制家族農業が維持されるなかで働きに出たケースである。夫は経済的な必要性のなかで出稼ぎに行っており、妻もまた、一時的な賃労働の出稼ぎに行くことで家計を補った。田代洋一は、農家女性の農外就労賃金を「切り売り労賃」と規定し、それが形成されるメカニズムを農工間の家計費均衡化傾向と、直系制家族農業の維持・継承を求めている家族総働き＝多就労化で説明する。そしてそれを可能にする前提条件としての三世代家族＝直系制家族の存在に注目している（井野・田代 1992）。第一のパターンの出稼ぎもまた、多就労化のひとつの形といえ、それは、三世代直系制家族のなかで可能になっていた。つまり、彼女らの出稼ぎは、縦系の世代の網の目のなかで、また横系の夫との関係のなかで行われ、直系家族制の家に埋め込まれていた。さらに、より早い時代に出稼ぎに行った彼女らは、村の網の目のなかにもいた。であるからこそ、彼女らにとっては、出稼ぎが新鮮な生活として、より積極的に意味づけられる部分もあるのだろう。

これに対して、第二のパターンは、第一次産業の著しい減少という時代の流れのなかにあり、また、女性たち自身のライフステージも中高年齢期にあった。子どもが学校を卒業したり結婚するなどして、手がかからなくなったライフコース上のタイミング、つまり「空の巣期」に、および次の世代に譲った高齢期に、夫婦で一時的に地元を出て働き、また家に帰っていく見込みがある。そうした意味では、このケースも直系制家族のなかに埋め込まれているといえるだろう。こうした彼女らの出稼ぎは、経済的な必要はもちろん重要なのであるが、同時に、家のなかで子どもや嫁、孫との関係にわずらわされない「自由」を確保するものとしても意味づけられていた。つまり出稼ぎは、長い高齢期を過ごす一石二鳥の手段としても生きられているようであった。また、90年代以降に出稼ぎを始める彼女らは、もはや農業を主な生業とせず、村のつながりで出稼ぎに行くものではない。むしろ、就労経路は友人の口コミや職業安定所が中心になっていく。

その一方で、1990年代以降に単身で出稼ぎに行く第三パターンの女性の生活は、やや脆弱であった。死別の場合はまだ家に包摂される傾向があるが、とくに離婚や未婚などの背景を持つ女性のケースは、経済的な問題が大きく、それが出稼ぎに行くことの直接の背景になっていた。加えて、もちろん他のパターンと同様に家族との関係は存在するけれども、それは家に埋め込まれているというよりは、子どもがいる場合は娘との関係に限定されがちであり、夫や自分の実家（生家）との関係は薄い。および一部のケースは、地元に戻りにくいことも考えられた。ここからは、単身女性の経済的な切実さや、地元での居場所のなさ、限定的な親族ネットワークといった、日本の中高齢期・単身女性の、ジェンダー化された家と経済がリンクした問題が透けて見えるものである。ただし、そうしたなかでの出稼ぎが、よりポジティブな経験としても意味づけられていたことを見逃す

べきではないだろう。いろいろな事情もあったが、それゆえにこそ、場所を変え、人間関係を変えて、第二の人生の仕切り直しの場合として、出稼ぎは生きられている部分もあるのである。

以上のように、労働市場や家のジェンダー構造のなかに女性の労働移動は位置づけられ、また生きられてもいた。

〔付記〕

本調査は、関東圏の旅館で働く多くの方々、および青森に在住の女性の方々に多大なるご協力をいただいたことで、実現しました。貴重なお話を時間を割いて聞かせてくださり、深く感謝して記したいと思います。また執筆にあたっては、弘前大学のフィールドワーク研究会（F研）の皆様に数々の有益なコメントを頂戴しました。本研究は、2008年度「弘前大学若手萌芽研究」から助成をいただきました。

〔注〕

- 1) 実態レベルにおいても、本ケースでは、初年度は職業安定所を通して「出稼ぎ手帳」を作り働き始めるが、すでに「通年」出稼ぎがほとんどで、出稼ぎ手帳もほとんど役割を果たしていないという場合が多かった。また、実際に地元に戻るかどうかあいまいなのである。田辺照子は、紡績などの繊維工業の女子労働者について、戦後の流動形態の特徴を考察している。彼女らは解雇後、農村に帰らず、紡績工場の所在地である関西、中京地区周辺にそのまま再就職するものと、一応還流して再流出する2つのケースがある。この還流は戦前の様子とは異なっており一時的な休養のようなものであり、大部分が再流出し、「下降の遍歴を辿って都市に累積されている」という（田辺 1961: 96-102）。田辺と同様の議論としては、（竹中 1989）（蘭 1994）も参照のこと。なお後ほど示すように、本調査のケースにおいても、もはや地元に戻らないかもしれない、という意味では出稼ぎの定義から限りなく遠くなってくるものもある。しかし、それは男性とは異なっており、地元に戻る資源の少ない女性の立ち位置をよく示しており、それもまた、女性の労働移動の特性を表していると考えている。
- 2) この青森の女性の出稼ぎに関する調査は、就労先の関東圏の温泉地で行ったものと、青森県で行ったものの、大きく2つに分けられる。就労先の関東圏の温泉地では、2006年から質的調査を継続している。2日間などの短期から、3週間ほどの長期まで、複数回の滞在により調査を重ねた。調査方法は、聞き取りや参与観察、資料収集などの質的調査である。調査対象者は、旅館の経営者と現・元従業員、出入り業者、他の4つの旅館経営者と従業員、町内の3つの自営業者とその客、まちづくり団体、見番組合、旅館組合、ハローワークや役場、県庁などの各関係機関等である。出稼ぎを送り出す側の青森県では、青森在住の出稼ぎ相談員や旅館の元従業員への聞き取りと、ハローワーク、県庁、役場の担当部署での聞き取り調査および資料収集を行なった。なお、2006年の調査データの一部は、2007年3月弘前大学人文学部卒業の伊藤優より提供を受けた。
- 3) 渡辺・羽田らが東京都内の223の事業所を対象として1971年に行った「出稼労働者雇用事業所調査」の結果からは、1970年代前半までの女性の出稼ぎの動向が確認できる。4,804人の出稼ぎ者のうち、女性は9.1%であった。業種別の女性労働者の割合は、建設業4.7%、製造業16.6%、その他30.5%であり、男性に比べて女性は建設業よりも製造業その他で働く傾向があった。また女性労働者を年齢別にみると、24歳以下22.1%、25-34歳17.9%、35-44歳24.1%、45-64歳35.4%、65歳以上0.5%という分布になっている。男性労働者の年齢分布がそれぞれ13.2%、24.9%、35.3%、24.7%、1.9%と中年層に山があることと比べると、女性労働者は若年層と中高年齢層に二極化していることが分かるだろう。女性の年齢別・業種別には、建設業では35-44歳が42.8%と最も多く、製造業では25歳未満が59.0%、その他の業種では45-64歳が59.2%と多くなっていた（渡辺・羽田編 1977: 16-9）。

- 4) 吉田義明は、農村労働市場と農家女性労働力の変容を議論するなかで、農村的な東北労働市場の大きな特徴として、1970年代からの農村進出企業の展開により、第一次産業およびそれと深い関係を持っていた地場産業が圏外移出型の加工組立産業に置き換えられていくような農村の工業化と、公共事業の進出を、具体的な統計から指摘する（吉田 2001）。
 - 5) 調査対象者の個別の聞き取りの日時や場所は、匿名化を図るために、あえて掲載していない。なお、質問者の問いかけなどは、調査対象者の語りに大きく影響すると思われるもののみ、カッコに入れて示している。語りは、適宜相槌を抜くなどの読みやすくする工夫を行っている。
 - 6) 千葉悦子は、1969年の農家主婦の農外就労に関する意識調査の結果から、「仲間が多いので楽しい」「時間がきちんとしているのよい」「農作業より楽である」などと、農家の女性が低労賃や力仕事、汚れ仕事であっても、農外就労をプラスに評価していることを示す。そしてこのことは逆に、女性に負担が集中する農業労働の実態が浮かび上がると指摘している（千葉 2000: 105）。
 - 7) 本調査からは、女性の宿泊業への出稼ぎについては、その形態と就労経路に注目すると、ふたつのパターンがみえてきた。ひとつは、口コミにより「季節」で長野に働きに行く、ふたつは、職業安定所を通じて「通年」で関東圏内の旅館に働きに行くということである。2000年ごろの青森県の女性の出稼ぎの数としては、この長野への出稼ぎが圧倒的に多かった（山口 2010）。この長野の出稼ぎは、「来年もまた来てください」のように、口頭で宿泊施設から働く要請もあるし、まとめて仕事の斡旋をしている人もいる。何台ものバスで、秋に送って春に迎えに来る。紹介料を宿泊施設からとるので、人数をそろえて、向こうで、「ここさ何人、ここさ何人って、分配して」行くのだという。そして、このネットワークのなかでは、地元の青森で、また長野の就労地において、労働条件に関する情報交換も盛んに行われていた。
 - 8) 大沢真理は、「雇用の女性化」における欧米と日本のきわだった差異を明らかにしている。日本の動向は、欧米のようなホワイトカラー化とサービス経済化によるものではなく、ブルーカラー職種にリードされた女性化であるという。とりわけ、1985年以降、製造業への中高年女性のパートタイマーとしての参入、および第三次産業での中高年パートの増大が確認されている（大沢 1993）。Gさんの製造業への季節出稼ぎもまた、こうした流れの中にあると予想されるところである。
 - 9) 武田尚子と文貞実『温泉リゾート・スタディーズ』のなかで、北海道の利尻島・礼文島から箱根温泉へと出稼ぎに来た女性達の動向について詳しい報告を行っている。そちらも参照のこと（武田・文 2010）。
 - 10) たとえば、2000年の青森県の『労働市場年報』によると、中高年齢者の職業紹介状況（パートタイムを除く全数）は、新規求職者数65,197人で、新規求職者全数の39.0%を占めている。中高年齢者の就職者数は6,543人で、就職率は10.0%となり、非常に低い数値となっている（青森県労働局職業安定部 2000: 11）。また、全年齢層の有効求人倍率は2003年1月現在で0.32倍と全国平均（0.60倍）を大きく下回っているが、これを年齢別にみると、60-64歳の年齢層が最も低く、パートタイムを除く常用で0.06倍、常用的パートタイムで0.94倍となっており、特にパートタイムを除く常用で厳しい状況にある（青森県企画振興部企画課編 2003: 26-7）。中高年層がより安定的な雇用条件で働くのは極めて困難な様子が見えてくる。
- そもそも青森県は、製造業を中心とした基幹産業に乏しいということもあるけれども、増大する第三次産業においても、社会保険などの制度運用の問題とも相まって、より安定的な常用雇用が非常に限定されているのは言うまでもない。

【文献】

- 青森県, 1967a, 『青森県の出かせぎ——出かせぎ世帯実態調査報告書』。
- , 1967b, 『出かせぎ世帯実態調査統計表』。
- , 『出稼対策の概況』（1969～1990年の各年）。
- 青森県企画振興部企画課編, 2003, 『青森県社会経済白書——高齢者の就業環境づくりに向けて』。
- 青森県商工労働部, 2008, 『出稼対策の概況』。

- 青森労働局職業安定部, 2000, 『平成12年度労働市場年報』.
- 蘭信三, 1994, 「都市移住者の人口還流——帰村と人口Uターン」松本通晴・丸木恵祐編『都市移住の社会学』世界思想社, 165-198.
- 千葉悦子, 2000, 「農家女性労働の再検討」木本喜美子・深澤和子編『現代日本の女性労働とジェンダー』ミネルヴァ書房, 86-123.
- 服部良子, 2000, 「家族的責任」玉井金五・大森真紀編『新版社会政策を学ぶ人のために』世界思想社, 172-196.
- 弘前大学人文学部社会行動コース, 2006, 『「出稼ぎと人生に関するアンケート」調査報告書』.
- 井野隆一・田代洋一, 1992, 『農業問題入門』大月書店.
- 石川雅典, 1987, 「青森県の出稼ぎ」渡辺栄・羽田新編『出稼ぎの総合的研究』東京大学出版会, 73-86.
- 神谷隆之, 1995, 「ホテル, 旅館の労働事情」『日本労働研究雑誌』425: 21-31.
- 木本喜美子・深澤和子編, 2000, 『現代日本の女性労働とジェンダー』ミネルヴァ書房.
- 松本通晴・丸木恵祐編, 1994, 『都市移住の社会学』世界思想社.
- 宮出秀雄, 1956, 『農村潜在失業論』有斐閣.
- 大川健嗣, 1974, 『出稼ぎの経済学』紀伊國屋書店.
- , 1979, 『戦後日本資本主義と農業』御茶の水書房.
- 大河内一男, 1950, 「賃労働における封建的なもの」『経済学論集』19(4): 1-14.
- 大沢真理, 1993, 『企業中心社会を超えて——現代日本をジェンダーで読む』時事通信社.
- 作道信介, 1997, 「新聞記事にみる青森県の出稼ぎ」編成——近代化のなかの『出稼ぎ』試論, 言説からのアプローチ『文経論叢』32(3): 31-87. (近年一部改変の上, 以下にも掲載された. 作道信介, 2008, 「津軽の『出稼ぎ』編制——地元新聞にみる出稼ぎ言説の分析」山下祐介・作道信介・杉山祐子編『津軽, 近代化のダイナミズム——社会学・社会心理学・人類学からの接近』御茶の水書房, 335-378).
- , 2005, 「平賀町A集落にみる出稼ぎのある暮らし——Push-Pullにおける『Hold』という視点」丹野正編『急速高齢化地域に関する学際的共同研究——近代化のスローモーションから先行する青森県津軽地域へ』(2001-2004年度科学研究費補助金研究成果報告書, 弘前大学): 37-67. (近年一部改変の上, 以下にも掲載された. 作道信介, 2008, 「ホールとしての出稼ぎ——A集落の生活史調査から」山下祐介・作道信介・杉山祐子編『津軽, 近代化のダイナミズム——社会学・社会心理学・人類学からの接近』御茶の水書房, 99-126).
- 四宮恭二, 1953, 『日本農業の社会学——兼業農家の実証的分析』有斐閣.
- 隅谷三喜男, 1955, 『日本賃労働史論』東京大学出版会.
- 武田尚子・文貞實, 2010, 『温泉リゾート・スタディーズ——箱根・熱海の癒し空間とサービスワーク』青弓社.
- 竹中恵美子, 1989, 『戦後女子労働史論』有斐閣.
- 田辺照子, 1961, 「婦人労働における出稼ぎの性格」『社会政策学会年報 婦人労働』9: 70-109.
- 渡辺栄・羽田新編, 1977, 『出稼ぎ労働と農村の生活』東京大学出版会.
- , 1987, 『出稼ぎの総合的研究』東京大学出版会.
- 山口恵子, 2008, 「地方労働市場の変化と地域移動」『理論と動態』1: 145-159.
- , 2010, 「統計にみる青森県の女性出稼ぎの動向」『人文社会論叢(社会科学篇)』23: 209-219.
- 山下雄三, 1978, 『出稼ぎの社会学』国書刊行会.
- 矢野晋吾, 2004, 『村落社会と「出稼ぎ」労働の社会学——諏訪地域の生業セットとしての酒造労働と村落・家・個人』御茶の水書房.
- 吉田義明, 1995, 『日本型低賃金の基礎構造』日本経済評論社.
- , 2001, 「農村労働市場と農家女性労働力——『いえ』の労働と自分の労働」竹中恵美子編『叢書 現代の経済・社会とジェンダー 第2巻 労働とジェンダー』明石書店, 219-243.